

『佛教文学』第二十三号 抜刷  
平成十一年三月 発行

東西中世絵画にみる他界観  
—悪道と煉獄の比較を中心に—

鷹 巢 純

# 東西中世の絵画にみる他界観

—— 悪道と煉獄の比較を中心に ——

鷹 巢 純

## 1 「浄土双六」と「蛇と梯子」

東西の代表的な宗教である仏教とキリスト教は、他界観について対照的な発想をもつ。仏教についていうなら、輪廻という循環を基本構造とする他界観があり、循環する限りが苦しみの世界であり、この循環からの離脱が善き目標とされる。一方のキリスト教では最後の審判によって地獄へあるいは天国へゆくことが決定され、いずれへ赴いたにせよそこでの暮らしは未来永劫に続くこととなる。この差異は共に地獄と呼ばれる仏教のそれとキリスト教のそれとの間でも例外ではない。仏教においては地獄の最悪処とされる阿鼻地獄にあっても、一中劫<sup>1)</sup>という長大な期間ではあるものの、責め苦にはやがて終わるときがあり、その先に輪廻の新たな段階を迎えることになる。一方、キリスト教にあっては地獄はまさに「永久の火」<sup>2)</sup>であり、一旦始まるやその責め苦は終わることがない。通過点としての地獄と終着点としての地獄。それぞれに極めて正統な教義に基づく悪処の観念には、重複する要素は意外に少ない。それでは両宗教における悪処のイメージに共通した普遍性を見だし、その普遍性に基づく比較作業を通じて両者の文化的傾向を理解することは不可能なのだろうか。

ここで極めて卑近な例を挙げてみよう。いわゆる「上がり双六」の起源の一つに「浄土双六」<sup>3)</sup>があることはよく知られている。浄土双六の基本構造は、地獄に始まり浄土へ到達する過程を競うというもので、これは明らかに近世における日本の仏教徒の通俗的なレベルでの他界観を前提としたものと言えよう。一方、西洋では「蛇と梯子」<sup>4)</sup>と呼

ばれる古典的なボードゲームが現在まで人気を得ているが、これが通俗的なレベルでの西洋キリスト教徒の他界観を前提としたものであることはあまり指摘されない。このゲームも一種の上がり双六で、最下層の振出から市松模様に切られた駒を左右に蛇行しつつ最上層端に設けられた上がりを目指すというもののだが、途中の駒のうち上下に隔った任意の二つが梯子あるいは蛇でつながれ、梯子の下端の駒にさしかかれば上端へと一気に上昇でき、蛇の上端の駒にさしかかれば下端へと転落しなければならないという仕掛けが施されている。イギリス・サリー州の聖ペテロ及び聖パウロ教会の13世紀のフレスコ画（図1）には画面中央に天国への上昇を促すモチーフとして梯子が、向かって右下端に地獄への墮落を促すモチーフとして禁断の木に巻き付く蛇がそれぞれ描かれ、ゲームが前提とした理念を見ることができる。このようにゲームに表された通俗的なレベルでは、仏教とキリスト教徒の他界観は、悪処から善処への上昇という相互に似通った趣を見せている。すなわち、宗教感情の基層に降り立つとき、両宗教の他界観は比較に十分な普遍性を見せるのではなからうか。以下、善処への過渡点としての悪処という観点に絞って両者の美術を比較したい。

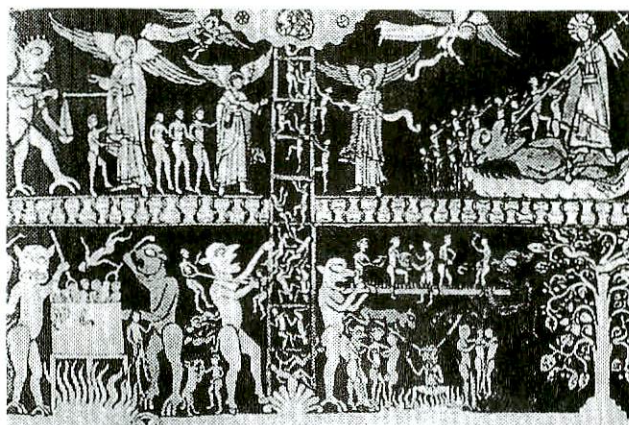


図1 聖ペテロ及び聖パウロ教会フレスコ画（13世紀）

## 2 善処への過渡点としての悪処

正典の中に副次的で断片的な記述しか期待できないキリスト教徒にとって、地獄は必ずしも整合性のある有機的な施設ではなかった。それはあるいは12世紀の『ウインチェスター詩篇』写本挿絵のように<sup>5)</sup>『ヨブ記』の記述<sup>6)</sup>にインスピレーションを受け海獣レヴィヤタンの大きな口として表現され、あるいは大地に穿たれた多数の穴<sup>7)</sup>として、また大釜<sup>8)</sup>として表現されるなど多様な形をとるが、それらが相互にどのような関係にあるのかは不明瞭である。

さてこのようにキリスト教徒にとって地獄は当初から問題の多い存在であり、ことに責め苦が一律に永遠に続くという苛酷に過ぎる地獄観には当惑させられていたとみえる。例えば3世紀前半に活躍したアレクサンドリアのオリゲネスはプラトン思想の影響の下で万物復興説を唱え、時の終わりには万物が善なる神のもとへ戻り、同時に悪は失せ地獄も消滅するという、まさしく善処への過渡点としての悪処という説明をしている。また4世紀末に成立したとされる新約外典『パウロの黙示録』<sup>9)</sup>44章ではキリストが復活祭の日曜日に「一日一夜の安息」を与えることを約束する。これらの発想は、絶対的な善と絶対的な悪とのほざまにあって、ことに悪あるいは懲罰の絶対的永遠性に一定の限界を設けようとする試みといつてよい。もちろんこれらの主張は後に非正統的なものとして教義的には退けられることになるのだが、古代的な他界観の伝統との繋がりが感じられるだけにより民衆に受け入れられやすく<sup>10)</sup>、以後のキリスト教他界観の地下水脈となってゆく。

実際、正統的なキリスト教にあっても永遠なる地獄という概念に限界を与えるために、さらに二つの冥府すなわちリンボ界と煉獄とを設けざるを得なかった。このうちリンボ界は古典古代に起源をもつ、いわばキリスト教内部に残存した異教的他界観の痕跡と言つてよい。ここに赴くのはイエスの生誕に先立つ時代すなわちキリスト教成立以前の古代の義人、あるいは入信の証しである洗礼を受けずに死んだ嬰兒といった、キリスト教的な審判が対象となし得ない人々である。したがってここでは懲罰は行われないか、行われたとしても微々たるものに過ぎない。一方



の煉獄は12世紀頃から急速に整理されていった概念で、微罪を犯した者が天国へ至る準備として罪の償いをなすべき場であり、地獄と天国という峻厳な二元論的他界観の中にあってル・ゴッフの言葉<sup>11)</sup>を借りるなら「第三の場所」の位置を占める。そこでは罪を犯した者であっても一定の償いの後に救われるという、いわば善処への通過点としての悪処という構造が見て取れる。

同様の構造は仏教、ことに日本のそれにおいてさらに顕著である。日本仏教における他界観の代表的な形態は、源信の『往生要集』にもみられるように六道と阿弥陀浄土とを組み合わせたものであろう。そしてもちろん『往生要集』は10世紀末以後の日本の他界観形成に重要な影響を及ぼすことになるのだが、ここで気を付けなければならないことは、『往生要集』にみられる六道と浄土とを対置するという組み合わせが、以後必ずしも堅持されなかったということであり、そのことは絵画によくあらわれている。

日本では六道は特に十王と結び付けて描かれることが多い。その場合、13世紀の兵庫・極楽寺本六道絵<sup>12)</sup>や14世紀の大阪・水尾本六道十王図<sup>13)</sup>などにみられるように、人間の生涯に続いて悪道が並びその果てに穢土ではない善処としての天道が描かれる傾向がある。恐らく17世紀初頭に作られたと思われる奈良・長岳寺本六道十王図<sup>14)</sup>はそうした系譜の集大成というべき大作で、人間の死から始まり悪道降下の果てに阿鼻地獄へ至り、一転阿弥陀の来迎を受け浄土（天道は半ば浄土に吸収されている）へ往生するという構成をとる。ここでは六道は転生の六つの選択肢としてではなく、死後に極楽へ至る過程で巡歴すべき世界として描かれる。そこには立山をはじめとする山岳信仰の影響もうかがえ、鎌倉時代以来の六道絵の変遷もこの長岳寺本のプランへ向かう過程として理解すべきことが分かる。あるいはこうした構造の遠い祖型を敦煌将来の十王経図巻に求めることも可能かもしれない。10世紀のこれらの図巻でも、十王の前で行われる地獄に紛う拷苦の続いた果ての巻末に、地獄の城門から開放される亡者を描くことが一般的である<sup>15)</sup>。

### 3 賽の河原・リンボ・冥府破り

仏教における悪道とキリスト教におけるリンボ・煉獄との類似は、このような構造面のみならずその細部にもあらわれる。室町時代以来、仏教的悪道と現世との境界に置かれる「賽の河原」もそうした一例だろう。賽の河原は子供が死後に向かう先とされるが、このことは（もちろん民俗的な土壌の存在も無視し得ないが）一面では自覚的に善悪を行い得ない存在を六道輪廻に組み込むことへのためらいの存在を感じさせる。そのような性質はリンボにも同様に存在する。先に述べたようにリンボの機能の一つは、キリスト教的倫理を適用することがためられる存在であるところの、洗礼前の子供が死後に向かう先としての機能である<sup>16)</sup>。こうしたリンボもラテン語の原義は「境界領域」であり、例えばダンテの『神曲』が地獄の第一圏に位置づけたように、キリスト教における死後世界観の地理にあって「地獄の辺土」におかれる。リンボでの子供に与えられた生活は概して幸福なものであり、神を見る喜びに浴せぬことが唯一与えられた苦しみとされる。この曖昧な劫罰は、まみえることのできない父母への思慕に苦しみながら地蔵の保護下で過ごす賽の河原の子供達の境遇と通じるものがあるだろう。

このリンボと結び付いてしばしば描かれる図像としてキリストの冥府降下<sup>17)</sup>がある。磔刑から復活までの三日間にキリストがリンボへ降りアダムやエヴァといった旧約聖書の人々を救い出すというこの主題は、新約外典『ニコデモ福音書』の記述によってよく知られている<sup>18)</sup>。このような英雄あるいは救世主が冥府を征服するというイメージはそれ自体かなり普遍的であり、我が国における比較例としても、仏教説話に限定せずとも朝比奈や義経の地獄破りをすぐさま想起できようし、冥府降下を矢田地蔵による亡者救済の図様と比較する研究者もいる<sup>19)</sup>。教義上この冥府降下の舞台はリンボであって永遠の劫罰の場である地獄ではあり得ないのだが、おもしろいことに図像としての冥府降下はかなり早い段階から舞台として地獄を暗示する描写が一般的となる。9世紀の『シュトゥットガルト詩篇』に描かれた冥府降下（図2）でも、冥府の門の内側には門番としての墮天使サタンと蹲る地獄の王としてのハデス



図2 『シュトウットガルト詩篇』冥府降下（9世紀）

が描かれ、その場が地獄を暗示していることが分かる。力強く扉を蹴破ろうとするキリストの姿が印象的なこの挿図の図像的特徴を挙げるとするならば、門・異形の門番・杖を手にする破地獄者ということになろうか。六道絵の世界でこれとすぐさま呼応する図像としては、目連救母説話における阿鼻地獄の情景だろう。兵庫・極楽寺本六道絵中幅にもみられるように、墮地獄の母を救うために目連は釈迦から借り受けた錫杖を手に、阿鼻地獄の扉を開き、異形の獄卒と交渉する。この設定は『目連救母経』<sup>20)</sup>に基づくものだが、そもそも中国における破地獄の儀式そのものが錫杖による地獄の扉の破壊という内容をもつものであるという。そして錫杖を手にした地藏が地獄から亡者を連れ出す一種の地獄破りにまで範囲を広げるなら、類例は先の矢田地蔵縁起にとどまらず膨大なものとなる。こうした類似は、冥府降下図像が宗教的歴史上の一事件から個人の罪のゆるしを願う普遍的文脈へと内容的に移行していった結果のものと思われる。

#### 4 裁きの橋

仏教において死後世界へ参入する場合、『地藏菩薩発心因縁十王経』（『地藏十王経』）にもあるように奈河と呼ばれる川があり、行いの正しいものはそこに架けられた奈河橋をわたり、行いの邪まなものはその度



合いに応じて川中をさまざまな条件でわたらねばならないとされる。こうした川と橋は十王を描いた絵画でごく一般にみられるが、ここでは未決段階で橋を渡れるか否かが予備審判的役割を果たしているといつてよい。

キリスト教においてこの橋と類似した機能は主に梯子が担当した。現世と他界とをつなぐモチーフとしての梯子は「ヤコブの梯子」として『創世記』に起源をもち<sup>21)</sup>、そのイメージは例えば1165年の聖ベルナルド『謙譲の階梯』写本挿絵<sup>22)</sup>のように図像化されている。ただしここでは梯子はあくまでも通路であり、裁きのニュアンスはない。しかし一方で梯子は道徳的試練を象徴し<sup>23)</sup>、そこからの転落を墮落と捉えるとき、例えば12世紀のイコン『クリマコスのヨハネの梯子』(図3)のように、梯子は裁きのニュアンスを帯びる。このイコンには梯子を登って地上から天国へ至ろうとする人々が描かれ、上空左端では義人を天使が見守り、悪魔は悪しき者を鉤で捉えて下方右端の地獄の口へと引きず

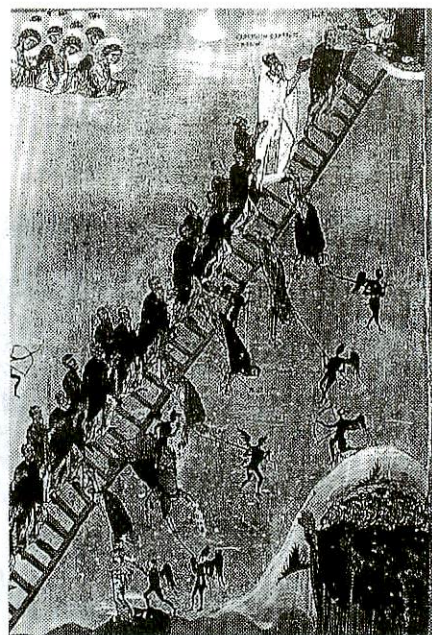


図3 『クリマコスのヨハネの梯子』(12世紀)



り込もうとする<sup>24)</sup>。冒頭に挙げた聖ペテロ及び聖パウロ教会のフレスコ画に描かれた梯子もこの系譜に連なるものである。聖書から比較的自由にイメージを膨らませた中世のいわゆる幻視文学では加えて、梯子の周囲で刃物や竜が障害となっていたり、梯子そのものが炎を発するなど、梯子を登ることの困難が一層強調される。

さらに幻視文学が提示するイメージの中には、審判をなす境界として梯子ではなく橋が採り上げられるものがある。6世紀末に教皇グレゴリウス1世が著した『対話録』には臨死体験をした兵士が語る死後世界についての記述があり、それによれば死後の道程には悪臭と黒煙とを放つ川があり、そこには義人のみが渡り得る橋が架けられているという。そして橋を渡り損ねたものは恐ろしい怪物に川へと引きずり込まれ、川を渡り切った先には黄金造りの館を含む輝く館が美しい草原にいくつも建っているのだという。ピサの聖マリア教会の15世紀のフレスコ画（図4）にはアーチをなした橋が描かれており、橋を渡り切った者に飛来し祝福を与える天使や、橋を渡り損ねて流れに沈んで行く者たち、さらには川のはとりで死者の魂を天秤にかけるとの天使の姿が描かれ、『対話録』同様の裁きの橋のイメージが示される。

聖マリア教会のフレスコの示すイメージは『地蔵十王経』のイメージとの興味深い類似を示していよう。橋を渡れるか否かが一つの審判であ

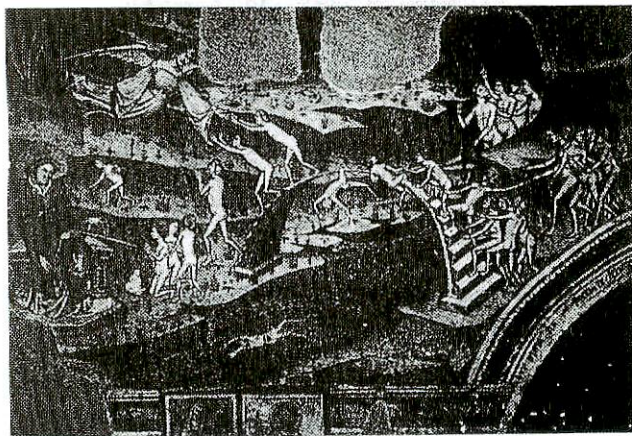


図4 聖マリア教会壁画（15世紀）

ることもさりながら、フレスコに描かれた天秤をもつ天使は、死者の衣の軽重で死者を裁く奪衣婆のイメージと重なり、川をめぐる幾重にも重ねられた重層的な審判のイメージにおいて、聖マリア教会のフレスコと『地藏十王経』とは重なり合う。『対話録』の場合も、裁きの橋・川中の怪物という点で『地藏十王経』と共通のイメージがある。もちろんより直接に『対話録』が想起させる仏画のイメージは二河白道図<sup>25)</sup>だろう。水と炎で示される罪の川の中央を橋のような細い道づたいに極楽の楼閣へと向かう二河白道図の義人の姿は、輝く館へと向かう『対話録』の記述と類似した印象を与える。

兵士の語るこの輝く館について、そこを肉体の罪を犯した義人の赴くところと『対話録』の中でグレゴリウスは解釈しており、これが後の煉獄のイメージと重なることが分かる。すなわち、『対話録』の橋は天国へ向かう贖罪の過程、つまり善処への通過点としての悪処であるといつてよい。この構造は六道十王図における奈河橋の位置付けと極めて近い。教皇と同時代のツールのグレゴリウスは『フランク史』で彼岸に白い館の建つ炎の館の幻視を記録しているが、『対話録』に類似したこの川に架かる橋は片足分の幅があるに過ぎず、この川越えが試練であることは明らかである。8世紀の初頭には聖ボニファティウスが死後世界の沸騰する泥のある川とそこに架けられた不安定な板橋について言及する。そこでも罪ある者はやはり橋から落ち、さまざまな責め苦を受けるが、橋から落ちた者たちもやがては責め苦を受け終えすべて彼岸の天の都に到達する。煉獄的なイメージは『対話録』よりもさらに進み、善処への通過点としての悪処という性質はより明白である。

以上、二元論的他界観の強固なキリスト教においても、六道十王図にみられるような善処への通過点としての悪処という観念が残存したことが理解できた。それらはもちろん聖書正典を直接の典拠とするものではなく、むしろ異教時代からの伝統的他界観やそれに根差したヴィジョンに基づくものであった。一方の六道十王図にみられる直線的な他界観も正統的な仏典に根差したのではなく、やはり仏教以前（あるいは以外）の他界観との統合のうちに生じたものであったと思われる。いずれもが

結果として、それぞれの宗教の独自性を中和するような方向性を示したことは興味深い。あるいはそこに宗教感情の普遍性をみることができるかもしれない。

#### 《注》

- 1) 『俱舎論』巻11 (大正大藏經29巻61頁下段)。他に『正法念處經』巻13 (大正大藏經17巻) には一劫とある。
- 2) 『マタイ伝福音書』第25章41節。
- 3) 展覧会図録『ゲームのデザイン 盤上の魔力』(1994年 INAX ギャラリー) に17世紀前半の作例のカラー図版がある。
- 4) 前掲『ゲームのデザイン 盤上の魔力』に数例のカラー図版がある。なお同書ではこれをヒンズー起源とするが、それでは蛇と梯子の象徴性は説明できない。キリスト教がインドに与えた影響として捉えた方が自然であろう。
- 5) A. K. ターナー『地獄の歴史』(1995年 法政大学出版局 以下「ターナー」と略す) 口絵1, 及び J. BASCHET/LES JUSTICES DE L'AU—DELA/1993/PARIS (以下「バッシュ」と略す) 図版2-1にカラー図版がある。同様の作例の図版がバッシュ図版4-1・2, 5-2, 6-1・2, 図4・63・65・71・83・139・140・150・151, ロバート・ヒューズ『西欧絵画に見る天国と地獄』(1997年 大修館書店 以下「ヒューズ」と略す) 図143・147などにある。
- 6) 第41章。
- 7) このイメージを表現した作例の図版としては、バッシュ図版5-1, 図95・96, ヒューズ図171などがある。
- 8) このイメージを表現した作例の図版としては、ヒューズ図149・150・173, バッシュ図版8-1, 図124などがある。
- 9) 荒井猷編『新約聖書外典』(1997年 講談社文芸文庫) 所収。この黙示録は最後の審判・天国・地獄について長文の記述があり、初期のキリスト教徒の抱いていた他界観を知るうえで興味深い。
- 10) 例えばオリゲネスの異端性については9世紀までに五度も教会会議で議決されているが、このことは彼の教説がいかに民衆に深く浸透していたかを示している。
- 11) ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』(1988年 法政大学出版局)。
- 12) 菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」(『仏教芸術』175号所収 1987年 毎日新聞社) に図像及びその構成に関する詳しい報告がある。また最も鮮明なカラー図版は奈良国立博物館編『仏教説話の美術』(1996年 思文閣出版) にある。
- 13) 図像の詳細は鷹巣純「茨木市水尾弥勒堂所蔵六道十王図に関する基礎的考察」(『愛知教育大学研究報告 人文科学編』第46輯所収 1997年 愛知教育大学) に、図像構成については鷹巣純「茨木市水尾本六道十王図について ―図像とその構成を中心に―」(『仏教芸術』236号 1998年 毎日新聞社) に詳細な報告を行った。また前者には最も鮮明な図版がある。



- 14) 鷹巣純「めぐりわたる悪道 ―長岳寺本六道十王図の図像をめぐって―」(『仏教芸術』211号所収 1993年 毎日新聞社)に図像及びその構成についての詳細な報告と図版がある。
- 15) 例えば中野照男『日本の美術 第313号 閻魔・十王像』(1992年 至文堂)第17図に大英図書館本の図像が単色で紹介されている。
- 16) M. VOVELLE/LES AMES DU PURGATOIRE/1996/PARIS 図26はそうした一例である。
- 17) この図像については①辻佐保子「『地獄の扉』の破碎と『天の扉』の解放 ―詩篇23篇7～10節と、詩篇117篇19～20節―」(『ビザンティン美術の表象世界』所収 1993年 岩波書店)②鐸木道剛「冥府下り、人類救済の事績：イスタンブール、カリエ・ジャーミー」(『名画への旅4 天国へのまなざし』所収 1992年 講談社)③木俣元一「『最後の審判』と『キリストの冥府降下』」(立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』所収 1993年 佼正出版社)を参照のこと。
- 18) 第17～27章。ただしこのことは同書が図像に先行する典拠であるということではない。
- 19) バーバラ・ルーシュ『もう一つの中世像 比丘尼・御伽草子・来世』(1991年 思文閣出版)。
- 20) 「公刊 目連救母経」(『美術研究』255号所収 1968年 美術研究所)。
- 21) 第28章12節。
- 22) C. HECK/L'ECHELLE CELESTE DANS L'ART DU MOYEN AGE/1997/PARIS (以下「エック」と略す)図25に単色図版がある。同書図17・26・58に類例がある。
- 23) 例えば「徳の梯子」図像のように。エック図29参照。
- 24) エック図38・61に類例がある。
- 25) 前掲『仏教説話の美術』に鎌倉時代の作例が4例カラー図版で掲載されている。